

文末表現から発話冒頭の談話標識的表現へ

東泉裕子 (東京学芸大学)

高橋圭子 (東洋大学)

From Sentence-final Expressions to Utterance-initial Discourse-pragmatic Expressions

Yuko Higashiizumi (Tokyo Gakugei University)

Keiko Takahashi (Toyo University)

1. はじめに

現代日本語の会話では、文末表現「だろ(う)」「でしょ(う)」(以下、「ダロウ」で代表させる)が、発話冒頭に現れたり、単独で現われたりすることがある。例えば、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)(以下、『BCCWJ』と略す)には、以下のような用例がある¹。

- (1) 「うーん、証拠かあ…。あいつ、口がうまいから、またいつもの調子でいいくるめようとするだろうなあ…」卓也は眉根を寄せて考えた。「だろう、それに、卓ちゃん、一本気だから、きっとけんかになってしまうと思うんだ。・・・」 (LBnn_00031、図書館・書籍、小林しげる『いつか青空』、KTC 中央出版、1999年)
- (2) 「そうなんですか。ううん。じゃあ確かに、完全なアリバイが成立しますね」「でしょ」「ということは残りの四人の中に犯人がいるって話ですかねえ」 (PB29_00573、出版・書籍、綾辻行人『どんどん橋、落ちた』講談社、2002年)

文末表現がなぜこのような位置に現れるのであろうか。現代語の接続詞「だから」は「指示詞+断定辞+接続辞」から成る「それだから」から派生したもの(「指示詞をとらないφ形+断定辞+接続辞」)だという(矢島 2011)。また、「だって」も「それだって」から発達したということである(Mori 1996)。同様に、文末以外の「ダロウ」は「そうだろ(う)」「そうでしょ(う)」(以下、「ソウダロウ」)の「指示詞をとらないφ形+断定辞」と考えることができるのではないだろうか。そこで、本稿では近代語のコーパス(『太陽コーパス』および『近代女性雑誌コーパス』)と現代語のコーパス(BCCWJ)に見られる「ソウダロウ」と文末以外の位置に現われる「ダロウ」の用例を比較することにより、「ダロウ」の文末から文末以外への用法拡張の様相を観察することにする²。

2. 先行研究

2.1 現代日本語の「ダロウ」

現代日本語の「ダロウ」は、基本的に、1)話し手の推量を表す、2)相手に同意・確認を求めるのに用いられる文末形式とされる(『日本国語大辞典 第二版』、日本語記述文法研究会編 2003 など)。しかし、上の例(1)や例(2)にも見られるように、現代語では文末以外の位置にも生じている。このような「ダロウ」の文末以外の位置における用法に関する研究は管見ではわずかである³。

¹ 『BCCWJ』の用例には、サンプルID、レジスター、出版年を付記する。さらに、書籍には執筆者、書名、出版社も記す。

² 本稿では「のだろう」「んでしょう」など「の(ん)」に後続する「ダロウ」は調査対象に含めない。

³ ただし、『日本国語大辞典 第二版』の用例に、例(2)のような単独の「ダロウ」の例がある(芥川龍之介

杉浦(2012)は、会話分析の立場から相互行為的文脈における「ダロウ」について論じている。そして、「ダロウ」は「評価- (非) 同意」という行為連鎖の「(非) 同意」の位置に生じ、「直前の話者の見方・判断」への応答として利用されると指摘している。さらに、杉浦(2013)は、マルチモーダル分析の立場から「ダロウ」単独ターンによって示される「同意」の強さについて詳しく論じている。

Higashiizumi and Onodera (2013)は、歴史語用論の立場から、会話に現われる「ダロウ」の生起位置の変化を調査した。現代日本語研究会編(1997, 2002)のコーパス(以下、『現代日本語』)から用例を集め、「ダロウ」が文末以外にも、例(1)のように発話冒頭に現われたり、例(2)のように単独で現われたりすることがあるということを確認した。また、次の例(3)のように、「でしょ」の前にポーズがあることを示す読点がある用例もあった⁴。

(3) [食事時の飲み物についての話]

B: ヨーロッパ行ったらね。

A: ワイン、でしょ↑

B: ヨーロッパ行ったらワインでね、(うん Inf(女)) 水をの、くれってゆうのはね、アメリカ人と日本人ぐらいたって、ヨーロッパ人はゆうんですけどー。

(現代日本語研究会編(1997) 6921-6923 行改変)

以上を踏まえ、『太陽コーパス』(以下、『太陽』)の「口語」「会話」における「ダロウ」の生起位置を調査したところ、例(1)~(3)のような用例は『太陽』のデータには皆無であることがわかった。また、それぞれのコーパスにおける「ダロウ」全用例数に対する「ソウダロウ」の用例数の比率を比べると、現代語の会話ではわずかながら下がっていた(後述の表2参照)。

ただし、この研究は、現代語の会話の用例と近代語の雑誌の口語体会話の用例という異なるレジスターにおける比較であるため、同じレジスターでの用例の比較が必要である。そこで、本稿では、現代語と近代語における小説の会話部分に見られる「ダロウ」の用法を量的・質的に分析する。

2.2 歴史語用論における談話標識の研究⁵

ことばの使われ方が時とともにどのように変化したのかを問う分野である歴史語用論において、談話標識の歴史的発達の研究は主要なトピックのひとつとして定着しつつある(高田他 2011:30)。最近では、どの標識がどの位置に現れ、どのような機能を果たしているかという観点から議論されるようになってきている(高田他 2011:88-89、藤井 2013 など)。本研究はこれらの議論と軌を一にするものである。

1919『路上』、島崎藤村 1910~11『家』)。

⁴ 例(3)は、「でしょ」の前にポーズがあることを示す読点があることから、先行する文と一続きに発話される通常の文末表現「でしょう」とは異なる用法であると考えられる。

⁵ 「だろウ」は「に-て-あら-む」から変化した「で-あら-う」が変化した語で、「だろウ」という形は江戸時代後期の江戸語に現れる(『日本国語大辞典 第二版』)。天明・寛政期(1781-1801年)に定着し、洒落本では聞き手への「確認要求の表現」が多いという(鶴橋2013:42-46)。一方、「だろウ」の丁寧体「でしょう」は、断定の助動詞「です」の未然形に推量の助動詞「う」がついたもので、「でせう」の形で近世末期の文献で使用されている(『日本国語大辞典 第二版』)。「です・でした・でしょう」と変化する「活用のあるデス」は幕末の江戸の町人言葉から始まり、庶民向けの新聞や言文一致小説などで次第に一般していくが、1904年から使用された最初の国定教科書により全国に広まったという(田中2012: 174-178)。

3. 量的調査

今回の調査では、Higashiizumi and Onodera (2013)で使用した『太陽』における「ダロウ」の用例と比較するために、『近代女性雑誌コーパス』(以下、『女性雑誌』)のデータのうち「口語」体の「会話」を検索対象とした。また、『BCCWJ』では「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」⁶の「文学」の会話およびそれに準ずる部分で使用されている「ダロウ」の用例を集めた。『太陽』とともに、今回の調査に用いたコーパスをまとめると表1になる。

表1

コーパス	『太陽』	『女性雑誌』	『BCCWJ』
検索ツール	全文検索システム 『ひまわり』ver.1.3.1	全文検索システム 『ひまわり』ver.1.3.1	中納言 1.1.0
検索対象	文体：口語 種別：会話	文体：口語 種別：会話	出版・書籍 図書館・書籍 特定目的・ベストセラー
ジャンル	—	—	文学
期間	1895–1925	1894–1925	1971–2008

今回の調査対象である『女性雑誌』および『BCCWJ』における「ダロウ」の用法に、Higashiizumi and Onodera (2013)の調査結果を加えたものが表2である。『太陽』と同様、『近代女性雑誌』にも例(1)~(3)のような文末以外の用例は皆無であった。

表2

	近代語 (1894–1925年)				現代語 (1971–2008年)			
	『太陽』 (小説の会話)		『女性雑誌』 (小説の会話)		『BCCWJ』 (小説の会話)		『現代日本語』 (話し言葉の会話)	
文末表現の ダロウ (ソウダ ロウを除く)	1817	97.5%	326	95.9%	37789	97.4%	430	93.1%
ソウダロウ	47	2.5%	14	4.1%	808	2.1%	10	2.2%
文末表現以外 のダロウ (例(1)-(3))	0	0.0%	0	0.0%	192	0.5%	22	4.8%
合計	1864	100.0%	340	100.0%	38789	100.0%	462	100.0%

表2から「ダロウ」全用例数に対する「ソウダロウ」の用例数の比率は、わずかではあるが、現代語において減少傾向にあることが分かる。また、『BCCWJ』と『現代日本語』における「ソウダロウ」の用例数の比率もほぼ同程度であった。

文末以外の用法(「指示詞をとらない ϕ 形+断定辞」)は、『BCCWJ』のデータにも見られ、話し言葉の会話だけでなく、小説の会話でも使用されており、ある程度の広がり

⁶ 『BCCWJ』のデータは「コア」と「非コア」に分けられている。今回の調査ではコア・非コアを問わず、「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」の3つジャンルの全データを対象にした。

定着を示していることが分かった。しかし、今回調査したコーパスでは、文末以外の用法の発生プロセスを時系列的に論じられるようなデータを得ることができなかった。今後、1920年代から1970年代の間の50年間のデータを調査する必要があると考える。

4. 質的分析

「ダロウ」の文末から文末以外の用法への拡張の様相の一端を捉えるために、ここでは「ソウダロウ」と「ソウ」を伴わない単独の「ダロウ」がどのような文脈で使われているか観察したい。

まず、「ソウダロウ」は、次の例に示すように、先行文脈の相手の発話や話者自身の発話を指している。

- (4) 「わたしにしゃべられては困ったのかしら」 「たぶん、そうだろう」 「ってことは、関原さんは学君がわたしに何を話そうとしていたか、うすうす勘づいていたというの？」 「かもしれない」 (LBn9_00208、図書館・書籍、新津きよみ『血を吸う夫』、角川春樹事務所、1999年)
- (5) 「だが、あなたがどれほど文句を言っても、結婚の準備は急ピッチで進んだ。浜田さんはそういう流れに逆らいはしなかった。そうでしょう？ 彼は結婚をとりやめるつもりなんかなかった。聡美さんと一緒に私に会いにきたとき、浜田さんはとても幸せそうでした」 (OB6X_00071、特定目的・ベストセラー、宮部みゆき『誰か』、実業之日本社、2003年)

次に、「ソウ」などの指示詞を伴わない単独の「ダロウ」のうち、読点に後続するものは、先行する話者自身の発話が、相手の発話の繰り返しや代弁である例がある。

- (6) 「かわいいから染めちゃったらしいよ、ピンクに」 「げ」 「げ、だろ？」 (PB39_00297、出版・書籍、松りんこ『誰よりいちばんっ!』、光彩書房、2003年)
- (7) 「表の車の中さ。居眠りでもしてなきゃいいけどな」 リカが母親に会いに行ったりすることを考えて、一応道田に見張らせてあるのだ。(中略) 「もし道田君が眠ってたら…」 「叩き起こせ、だろ？」 「起こさなくてもいいわよ」と、真弓は言った。(OB3X_00137、特定目的・ベストセラー、赤川次郎『盗みに追いつく泥棒なし』、徳間書店、1987年)
- (8) 「女刑事はあんたがはじめてでね」 「困ったもんだ、でしょ？ でも世界はめまぐるしく動いてるのよ。すぐにわたしのような女も珍しくなくなるわ」 彼は少し笑い、それから顔をしかめた。(LBj9_00115、図書館・書籍、クレイグ・ホールデン(著)/近藤 純夫(訳)『リバー・ソロー』、扶桑社、1995年)

例(6)～(8)のような「ダロウ」は、指示詞を伴っていないが、相手の発話を繰り返したり、相手が伝えようとしている内容を話者が代弁したりして、先行文脈の発話を指していると考え、指示詞をとらないφ形+断定辞」と似たような働きをしていると考えることができないだろうか。

最後に、単独や発話冒頭の「ダロウ」の中には、杉浦(2012, 2013)のいう「評価-(非)同意」という連鎖の「(非)同意」位置に生じ、「直前の話者の見方・判断」への応答となっている、次のような例もある。

- (9) 「それがね、残業なんかしてたから明細見てびっくりしちゃった。手取りで二十五

万もあったんだよ」「それは悪くないね」「でしょう」「うん」「なんだか、私すこし自信が出てきちゃった。こうやって、自分の力でこれから生きていけるんじゃないかって」(LBr9_00215、図書館・書籍、白石 一文『一瞬の光』角川書店、2003年)

(10)「おれは今日、紫原の兄貴分をぶちのめした。(中略)そんなときに、同じ組の極道に手を出してみろ」「それはヤバいね」「だろう」「だけどさ、やられっぱなしはよくないよ」(LBr9_00134、図書館・書籍、馳星周『虚の王』光文社、2000年)

(11) 晶は唇を尖らせた。「そんなことできるわけないじゃん」「だろう。お前が心配すべきなのは、生活の問題じゃなくて、自分たちの音楽の変質じゃないのか。(略)」(OB5X_00248、特定目的・ベストセラー、大沢在昌、『氷舞』、光文社、1997年)

このような「ダロウ」も「指示詞をとらない ϕ 形」で「直前の話者の見方・判断」を指し、「指示詞をとらない ϕ 形+断定辞」として現れていると思われるが、詳しい分析と考察は今後の課題としたい。

5. まとめと今後の課題

文末に位置し、話し手の推量および聞き手への確認・同意要求を示すとされる「ダロウ」が、現代語の小説の会話でも、発話冒頭で使われたり、単独で現れたりしており、文末以外の位置へとその用法を拡張している様相の一端を観察した。そして、このような用法拡張のプロセスには「指示詞をとらない ϕ 形+断定辞」という形式が関わっている可能性があることも指摘した。これは、「だから」「だって」などの接続詞の談話標識用法の発達や、「結果」などの漢語名詞の副詞用法への拡張(東泉・高橋 2013、高橋・東泉 2013)などと似たような拡張のプロセスのように思われる。「共話」(水谷 2001)⁷的な文脈において、相手の発話や話者自身の発話の命題を「指示詞をとらない ϕ 形+断定辞」である「ダロウ」で指して自分の発話に組み込むことによって、文末以外の位置にも現われる表れるようになったのではないだろうか。

文末表現「ダロウ」の文末以外の用法への拡張は現在進行中の現象であり、本稿では近代語と現代語のコーパスの小説の会話における用例を比較して、拡張の様相の一端を捉えようと試みた。今後は文末以外の用法の発生プロセスを時系列的に調査する必要もあると思われる。

謝 辞

本研究の一部は、第13回国際語用論学会(International Pragmatics Association)のパネル・セッション Cross-Linguistic Approach to Form-Function-Periphery (LP and RP) Mapping: With Special Focus on “Exchange Structure” and “Action Structure”において発表したものです。ご助言くださった方々に感謝申し上げます。

文 献

現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』、ひつじ書房
現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』、ひつじ書房

⁷ 「共話」とは「聞き手があいづちを頻りに打ちながら(中略)話し手と聞き手が対立せず一体になって話す形」のことで、「対話」と対立するものである(水谷 2001:126)。

- 杉浦秀行(2012) 『『でしょう』を用いた評価への応答-行為と「なわ張り」の接点-』第30回社会言語科学会研究大会ワークショップ「相互行為の中で知識を主張すること-会話分析から見た「情報のなわ張り」-」発表
- 杉浦秀行(2013) 『『でしょう』単独ターンによって表明される同意の強さ-マルチモーダル分析によるアプローチ-』『JCLA Conference Handbook 2013』、pp.52-55、日本認知言語学会
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子編著(2011) 『歴史語用論入門』、大修館書店
- 高橋圭子・東泉裕子(2013) 「漢語名詞の副詞用法-『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパスを用いて』-」国立国語研究所『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.195-202.
(http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no4_papers/JCLWorkshop_No4_24.pdf)
- 田中章夫(2012) 『日本語雑記帳』、岩波書店
- 鶴橋俊宏(2013) 『近世語推量表現の研究』、清文堂
『日本国語大辞典 第二版』、小学館、ジャパンナレッジ版
- 日本語記述文法研究会編(2003) 『現代日本語記述文法4 第8部 モダリティ』、くろしお出版
- 東泉裕子・高橋圭子(2013) 『『結果、こういうことが言えそうです』～コーパスにみる名詞の文副詞的用法～』国立国語研究所『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.91-96.
(http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no3_papers/JCLWorkshop_No3_12.pdf)
- 藤井聖子(2013) 「条件構文の談話標識化の諸相」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.27-34.
(http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no4_papers/JCLWorkshop_No4_04.pdf)
- 水谷信子(2001) 『続日英比較話しことばの文法』、くろしお出版
- 矢島正浩(2011) 「時間的・空間的比較を軸にした近世語文法史研究-ソレダカラ類の語彙化を例として-」『近代語研究のパーспекティブ』、pp.56-82、笠間書院
- Higashiizumi, Yuko, and Noriko O. Onodera (2013) Form-Function-Periphery Mapping in Japanese: 'Exchange-Structure' and 'Action-Structure'. *Abstracts*, pp.105-106. The 13th International Pragmatics Conference, New Delhi, India, 8-13 September 2013
- Mori, Junko (1996) Historical Change of the Japanese Connective *Datte*: Its Form and Functions. In *Japanese/Korean Linguistics*. 5. pp. 201-218.

コーパス

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)
- 国立国語研究所『近代女性雑誌コーパス』
- 国立国語研究所(2005)『太陽コーパス』(国語研究所資料集 15) 博文館新社